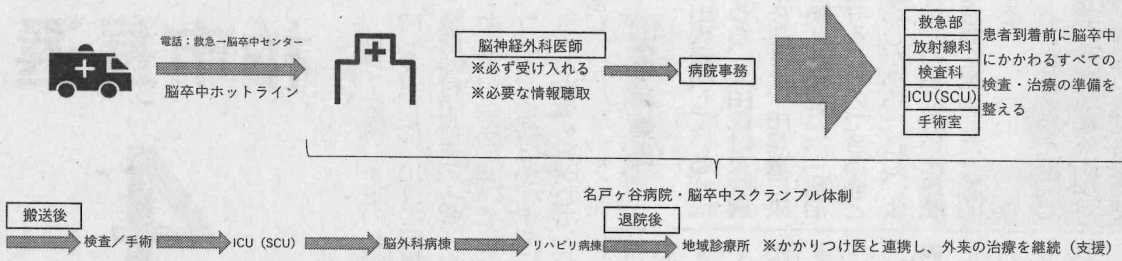


脳卒中センター来月開設

脳神経外科体制拡充へ



名戸ヶ谷病院(松澤和人院長)は来月、24時間365日受け入れ態勢の脳卒中センターを開設する。脳神経外科の井上靖章部長(33)をセンター長とし、すでに柏市消防局との間で脳卒中(疑い)患者の救急搬送を受け入れるホットラインを構築。名戸ヶ谷病院の代名詞である「断らない救急医療」で培ったスクランブル体制を下地に、脳神経外科と救急科、麻酔科、CT、MRIなどが横断して連携する。搬送直後に検査開始でき、救命するうえで厚労省が推奨する治療までに要する時間「1時間以内」を大幅に短縮することも可能。「脳卒中は、1秒で救命ならびに回復の行方が変わる。病院の負担は大きい、脳卒中センターの意義は大きい」と井上センター長は話す。

脳卒中センターは、井上センター長を含めて6人の医師とスタッフで編成される。1人の医師が24時間365日オンコール体制をとり、柏市消防局救急課の救急搬送要請に直接応じ、受け入れを大前提とする。要請と同時に院内のスクランブル体制が生まれ、検査結果と患者の容体に応じて施術する。

井上センター長によると、施術までの時間は最短で6分(最長45分)と、厚労省推奨のおよそ10分の1、最長でも15分早い。「市民の皆さんに安心して

もらえる医療を提供したい」と井上センター長。柏市消防局救急課の涌井康雄課長によると、24時間365日の脳神経外科専門医療チームとのオンコール体制構築は、市内医療機関としてはじめて。「脳卒中は時間との戦い。専門医療が身近にあることは心強い」と話す。脳卒中センターは迅速、的確な救命だけに留まらない。救急搬送から治療までのいわゆる急性期だけでなく、回復期にも対応し、退院後の地元診療所との連携まで念頭に置く。「地元の医師と24時間つながり、必要に応じて支援する」と井上センター長。

名戸ヶ谷病院はさらに、来年度を目途に脳卒中の集中治療室(SCU)を開設する。脳卒中センターの医師も8人に拡充し、関連する名戸ヶ谷あびこ病院の専門医を含め、11人体制を敷く。「柏

市だけでなく、我孫子市や流山市、松戸市の皆さんを守る病院にしたい」と井上センター長。

脳神経外科の若きリーダー

脳卒中センター長

井上靖章(33)

井上センター長は京都大学医学部を卒業後、初期札幌積心会病院の脳卒中センターの谷川緑野センターとして1年、ハーバード大

院に務めた。その間に、ター長らの下で手技を磨いた。さらにフェローとして1年、ハーバード大

学関連病院であるプリガム・アンド・ウィメンズ病院に勤務。今年8月に帰国し、後期研修中を含めて推進していた脳卒中センターの設立に取り組んできた。

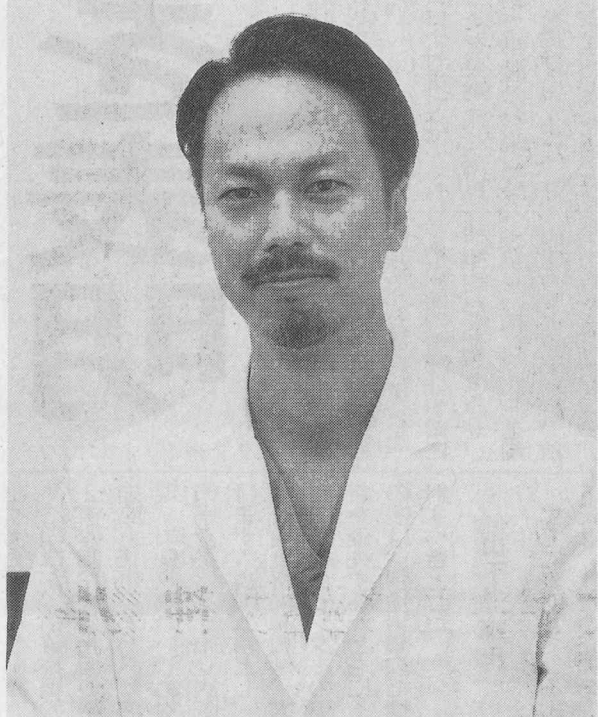
井上センター長の理念は、脳神経外科分野の高度医療の地域への還元にある。「都内に行かなくても、高度な医療が受けられるまことにしたい」。

井上センター長は前述のキャリアを通じて、谷川氏のほかにも、上山博康氏や福島孝徳氏ら脳神経外科の権威の下で、最高難易度とされる脳血管障害のバイパス手術や頭蓋底腫瘍手術を数多く経験してきた。

キャリアとして名戸ヶ谷病院を選んだのは、脳卒中センターやSCUと

いった理念の具体化に積極的だったからだ。高度な手技が必要な手術の多い大病院は魅力的だったが、「名戸ヶ谷でそうした高度な治療をし、将来の地域医療に寄与することのほうが意義深い」と井上センター長。

今後は構築したシステムを駆使すると同時に、若く志高い医師を集め指導し、日本屈指の病院をめざしていく。「地方でも相応のリソースは集められる。ロールモデルになり、他の地域でも同水準の医療が生まれれば」。名戸ヶ谷病院では、國府幸洋副院長が人口膝関節手術支援ロボ「ロザ・ニーシステム」を県内初導入し、先端かつ高度な医療を推進。安心できる医療に踏み出している。



脳卒中センター長に就任し、体制強化を指揮する脳神経外科の井上靖章部長